バラと横浜、バラ行進について

横浜の市花はバラである。これは平成元（一九八九）年の市制一〇〇周年を記念して、市民の投票で選ばれた。日本種のハマナスやイバラではない。西洋のバラ、洋バラである。今日の日本人にとって「服」といえば洋服であり、ただちに和服を想像する者はいなくなっていることと同様、バラといえば洋バラを指すことが一般になっている。

横浜市花のバラに対して、神奈川県花にヤマユリが指定されたのは昭和二六（一九五一）年と早い。もっとも横浜開港五〇年祭が開催された明治四二（一九〇九）年に、横浜貿易新報社が発行した『横浜開港五十年紀念絵葉書・乙種』には、制定されたばかりの「横浜市歌」の楽譜をベースに、その歌詞がヤマユリとサクラを添えて記されている一枚がある。仮に明治・大正期に市花が指定されていたならば、夏になると市域の野山にあふれんばかりに咲き、また横浜港が独占していた植物輸出の主力商品でもあったヤマユリになっていた可能性は高い。

日本への洋バラの導入と外国人居留地を有する横浜が果たした役割については、中野孝夫編『明治薔薇年表』（二〇〇五年刊）が、典拠となる新聞・雑誌記事を掲載して確かな資料集となっている。また、同氏「横浜の薔薇in明治初期」「横浜の薔薇in明治後期」（『日本ばら会年報』四八号・四九号／一九九八～九九年）や稿本『国際行進の誕生』（二〇〇二年）など、その成果には自称「濱っ子のローザリアン」中野氏の面目躍如たるものがある。しかしながら同氏は以上の業績を発表したのち逝去され、明治期のバラと横浜について論ずる機会はあったものの、その後の時代を含めて充分に論を展開することはできなかった。また筆者も先に「バラと横浜」と題して論じたことがあるが、行き届かなかった部分もある（近藤三雄・平野正裕著『絵図と写真でたどる明治の園芸と緑化』二〇一七年刊）。ここでは、横浜とバラの関係を新たな資料を含めて再論したい。

洋バラ導入と横浜

バラは明治五（一八七二）年五月に山手公園で開催された居留外国人たちによるフラワーショーにおいて植物商カール・クラマーによって展示され、その後国内に普及した。バラの栽培は東京・名古屋・大阪などの大都市に舞台が移り、発信の地である横浜は、居留外国人と地方官など一部の階層が取り組むにとどまったと思われる。横浜の日本人社会は貧富の格差が大きく中間層が不在であって、富豪としての横浜商人は、菊や朝顔などの江戸期以来の伝統的な園芸趣味に向かう傾向にあった。

低温低湿の環境で咲く洋バラは、日本の高温多湿では病気になり枯れやすい。したがって国内での栽培は植木屋の知識が必要であった。植木屋は洋バラに和名を付与して、伝統的な花の愛玩法である「見立」「番付」を発行してその花ぶりや香気を競い、広めていった（薔薇園吉見「西洋各国薔薇見立競」一八七五年／江戸東京博物館所蔵、『植物銘録鑑』の東京・名古屋・大阪で発行された各番付／国立国会図書館所蔵、いずれもネット上で公開）。国内にバラの栽培に力を入れる植木屋が出現するにしたがい、居留地貿易下で国内での商業活動が制限されていた横浜の外国人植物商がバラの普及に対する関わり方は、新種の導入に力点が移っていったものと思われる。

それまでは外国人植物商が担っていた植物貿易に、日本人植物商社が参入したのは、明治二三（一八九〇）年である。それは有限責任横浜植木商会（のちの横浜植木株式会社）の設立が契機であった。横浜植木は、外国人植物商社ボーマー商会の仕入れ主任鈴木卯兵衛が中心となり、クラマーによる洋バラ導入にいち早く反応して、自らの店や展示会にバラを咲かせた川本友吉・須田定次郎・飯島秋三郎ら横浜の有力な植木屋や、さらには東京の植木屋らが結集して組織された。

横浜植木は、外国市場向けにユリや花菖蒲などを美麗に描いた図譜や、挿絵に彩色石版画を施したカタログを発行した。横浜植木が和文で『百合花選』を制作したのは明治二七（一八九四）年である（国立国会図書館所蔵）。この三六種のユリを紹介した図譜は五年後には、『Lilies of Japan』と改名して欧文版が発行された（横浜植木株式会社所蔵）。ユリ根は欧米向け商品であったから、本来の用途は海外の需用者に日本のユリを紹介するために作成されたものであった。また明治期の横浜植木の海外市場向け図譜としては別に、花菖蒲が確認できる。

横浜植木とバラ苗

横浜植木株式会社は明治四〇（一九〇七）年から国内向けの種苗カタログ『定価表』を発行した。これにより同社は、それまでは植木屋や植物商を対象に販売していた輸入種苗の販路を、個人向けに広げることとなった。ちなみに横浜の外国人植物商社が発行した国内向けカタログはいまだ確認できていない。

横浜植木の国内向け『定価表』は現在のところ、明治四一年版から確認できる。この『定価表』を資料として、横浜植木によるバラ苗の国内販売の取り組みについてみてみよう。

表1は明治四一年版『定価表』に掲載されたバラ苗の種類である。四季咲き・一季二季咲きの区分はないが、バラ苗二五種、つるバラ六種、最新品種一種の計三二種が掲載されている。このラインナップは、翌明治四二年度版にも踏襲され、表1の掲載順のとおりに通番が付与されている。

表１　内国販売『定価表』にあるバラ苗（明治 41 年）

区分	価格	名称	色・姿容
バラ	10 本 2 円	Cloth of gold	薄黄千重大輪
		Captain Christy	桃色千重大輪
		Devoniensis	薄黄千重大輪
		Dutchess de Brabant	桃色八重大輪
		Her Majesty	肉色大輪
		John Hopper	深紅色大輪
		La France	桃色千重大輪
		La Marque	雪白千重大輪
		Madam Savage	肉色千重大輪
		Marie Van Houtte	薄黄八重大輪
		Magna Charta	桃色紅絞り大輪
		Madam Welth	黄色千重大輪
		Niphetos	薄黄八重大輪
		Ophirie	樺色大輪
		Paul Neylon	光沢アル桃色大輪
		Regulus	極紅大輪
		Rugosa Rubra	桃色一重大輪
		Rugosa alba	白一重大輪
		Safrano	黄樺八重大輪
		Sunset	黄樺千重大輪
		Souur de la Malmaison	白地紅ボカシ千重大輪
		The Bride	白千重大輪
		W.A.Richardson	黄樺千重大輪
		Kaiserin Augusta Victoria	白八重変咲大輪
		Moss Rose	桃色小輪
つるバラ	10 本 2 円	Banksia yellow	金樺千重菊咲小輪
		Banksia White	白千重菊咲小輪
		Climbing Malmaison	白地紅ボカシ中輪
		Cherokee pink	白一重大輪
		Gloire de Dijon	薄樺千重大輪
		Marechal Niel	薄黄千重大輪
最新種	1 本 2 円	Newport Ferry	野薔薇性の房咲にして白地桃色輸入奇品なり

出典：横浜植木株式会社『明治四十一年度　定価表』　横浜植木株式会社所蔵

表２　『園芸植物図譜』に掲載されたバラの品種と単価

No.	品種	種属	１株当たり単価	
			大正３	明治４４
1	Harry Kirk	Tea Rose		
2	Lady Alice Stanley	Hybrid Tea	¥2.00	
3	Walter Speed	Hybrid Tea		
4	Sun Burst	Hybrid Tea	¥2.00	
5	The Bride	Tea Rose		
6	La France	Hybrid Tea	¥0.70	
7	Juliet	Hybrid Bourbon	¥2.00	
8	Frau Karl Druschki	Hybrid Perpetual	¥0.70	¥2.00
9	Captain Christy	Hybrid Tea		
10	Black Prince	Hybrid Tea		
11	Kaiserrin Augusta Victoria	Hybrid Tea	¥0.60	¥0.70
12	Gloire de Dijon	Tea Rose		
13	Rainbow	Tea Rose		
14	William A. Richardson	Noisette Rose		
15	Catherine Mermet	Tea Rose		
16	Papa Gontier	Tea Rose		

出典：横浜植木株式会社編『園芸植物図譜　第十一輯』、同『明治四十四五年定価表』『大正三四年定価表』　横浜植木株式会社所蔵

しかしながら、明治四三・四年度版になると、バラ苗の価格リストが改定されて前書きがつくようになる。前書きの重要点は「左に列挙するは昨年弊社が海外より輸入したる四百有余種の一部分にて」とあるように、横浜植木がバラ苗の取扱品種を拡大したことである。その改定価格リストにはすべてが記されているのではなく、ごく「一部分」の六三種であった。その詳細を列挙することは控えるが一株当たりの価格別の品種数を示すと、

【四季咲き】

一円五〇銭…七種／一円…五種／七〇銭…一一種／五〇銭…二三種

【一季咲き】

七〇銭…二種／五〇銭…一四種

【番外】

一円…ニューポートフェリー種一種

表１に示された各品種については、「最新種」ニューポートフェリー種のみが残っているだけである。また表１のほとんどが「一〇本二円」（一本二〇銭）、ニューポートフェリー種のみ一本二円であったが、この改定によって一株（資料記載のとおり）あたり一円五〇銭～五〇銭となり、全体としては価格が上がっている一方、新味がなくなったためか、ニューポートフェリー種は二円から一円へと半額になっている。

明治四四・五年度版になると、横浜植木はバラ苗リストの前書きに「弊社は年々海外に於ける薔薇品評会に一等賞を得たる名花をその都度輸入する事とし」と著した。優良品種の導入に一層積極的になったことがうかがえる。

横浜植木が『植物園芸図譜　第十一輯』においてバラ一六種を彩色印刷で発行したのは、大正三（一九一四）年四月である。その一六種は、**表２**のとおりであり、近接した時期の『定価表』に必ずしも掲載されているものでもなく、また最新の品種でもなく、その選択の基準はわからない。同社が国内需用者に向けてビジュアルなバラの図譜を発行した最初と考えられる（**図１**）。

横浜植木の国内向け『定価表』は、大正中期に『園芸要覧』と名称を変えた。年次こそ印刷されていないが、大正九年度版と推定される『園芸要覧』は、それまでのバラ苗の表記が欧文名称であったものが、この年にかぎり和名をあてて記され、さらには詳細な形容説明が付されている（**図２**）。し

図１　『植物園芸図譜　第十一輯』に掲載されたバラの例　　横浜植木株式会社所蔵　左は表２のうちの、No.１～No.３、右はNo.４～No.６。

薔薇之部 ROSES

Perpetual Hybrid Tea Rose

one selection, 5 vrts. ¥ 2.00 10 vrts. ¥ 3.00 20 vrts. ¥ 6.00 30 vrts. ¥ 8.00

注意（左記各種の花形色合は春秋の花を以て揭げしもの故雅め御了承を乞ふ

永楽（性は四季咲木性花色は鮮なる濃紅色にて中心黒紅色なり花弁は平花にして厚く大輪豊満中花弁は大なるもの形なり 壹圓五拾錢

高千穂（四季咲木性にて花色は濃ダイヤ黄色なり花弁は厚く形は平花に近く剣形にて大輪豊満中花弁は大なるもの形なり 壹圓五拾錢

水晶閣（四季咲木性にて花色は濃ダイヤ黄色なり花弁は厚く形は平花に近く剣形にて大輪豊満中花弁は大なるもの形なり 壹圓五拾錢

楓林の暁（四季咲木性にて花色は濃ダイヤ黄色なり花弁は厚く形は平花に近く剣形にて大輪豊満中花弁は大なるもの形なり 壹圓五拾錢

錦嚢（四季咲木性花色は極紅色にして先端なり薔薇咲なり物受咲弁有八重大々輪花色鮮麗なり 壹圓五拾錢

図２　『園芸要覧』におけるバラの和名表記　　横浜植木株式会社所蔵　リストの冒頭部分。「永楽」「高千穂」「水晶閣」などの種名が見て取れる。

九）年のバラ祭に横浜市からバラ苗一七〇本が贈られ、植栽された（本宮一男「日露戦後期における横浜からポートランドへのバラの寄贈―都市と花樹寄贈を介した国際親善策―」『横浜市立大学論叢　人文科学系列』第六〇巻三号／二〇〇九年）。この一七〇本という数は、ポートランド市に対して他の諸都市が提供したバラ苗の数のうちで最大であった。植栽は赤いバラの周辺に白いバラを配して、日章旗のイメージを演出した。

また、大正一二（一九二三）年の関東大震災による横浜の罹災に対してシアトル日本人会から支援物資が送られた。その後の復興の過程でシアトルからの親善事業の申し入れがあり、横浜から石灯籠が贈られ、その返礼としてシアトルからバラ苗が昭和五（一九三〇）年・六年の両年にわたって計二〇〇〇本が横浜市に届いた（大西比呂志「シアトルの石灯籠とバラ」『横浜をめぐる七つの物語』二〇〇七年刊、本宮一男「昭和初期における国際親善策の一側面―シアトルの石灯籠と碑文を手がかりに―」『外交史料館報』第二二号／二〇〇八年）。

この両次にわたるバラを介した国際親善策については右の論考にゆずり詳述は控えるが、本宮一男氏はアメリカで生じた反日感情を背景としていることに留意する。すなわち国家間での政治的緊張とは別レベルでの、都市間の友好をいう地平でもって、花樹の贈答という「善意」を受け取りやすいものに換えて親善外交の実を挙げようとした、とする。説得的な指摘である。

ポートランドのバラ祭については横浜市がバラ苗を寄贈した翌年に「薔薇祭の由来」と題して『実業之横浜』誌が報ずるところがあった。同市は「年中の気候宜しき為め薔薇の培養に最も適し四時美しき花の絶ゆることなし従つて外国に例なき薔薇祭なるもの旧くより行はれ其日は紅白紫黄さまざまなる大なる薔薇の花を以て飾りたる自動車に盛装せる令嬢数多打乗り市中を練り歩き夜間は知事の邸第にて盛なる夜会を催し舞踏仮装会などもありて賑かに一日一夜を送るを例とせり」（『実業之横浜』一九一〇年六月一日号）。ポートランドの例にならったかどうかは詳らかでないが、約四半世紀後の横浜でも類似のイベントが催されることになる。

かしながら欧文名との対比はなく、翌大正一〇年度版で再び欧文に復していることから、すでにバラ苗の注文や取引に欧文名が通用していたことが考えられ、また突然の和名の適用にはかえって混乱が生じたのではないかと思われる。すべての『園芸要覧』を検討できてはいないが、横浜植木は以後、和名での表記はしなかったようである。

バラと親善政治

バラやバラ苗が切り結ぶ横浜市の国際親善策については、近年解明がすすんでいる。

米国オレゴン州ポートランドは、今日「バラのまち（The City of Roses）」として有名である。そのポートランド市からの要請に基づき、明治四二（一九〇

「愛市」運動とバラ行進

シアトルから贈られたバラ苗計二〇〇〇本のうち四〇〇本は東京市に贈られることとなったが、残る一六〇〇本は、野毛山公園・保土ヶ谷児童遊園・山下公園の復興事業で新設された三つの公園に移植されることとなった。このうち野毛山公園ではバラ苗を増殖させて、開港記念日に市民に向けて廉価で配布されることとなり、市をあげてのバラ栽培を演出したばかりか、青少年の公徳心の涵養と市内美化運動のシンボル「愛市の花」としてバラが取り上げられ、胸につける造花が売り出されることとなった（以上の詳細は、前掲大西論文を参照）。

戦前期の横浜でバラが最も大きくかつ象徴的に取り上げらたのは、昭和一二（一九三七）年六月三日の「バラ行進」であろう。同年は、神奈川・子安・生麦地先の横浜市営の全埋立地が竣工し、大黒町・宝町・恵比須町の工場用地が出現して、六月二日の開港記念日の催しも「埋立祝賀開港記念祭」と題して盛大に取り組まれた。その掉尾を飾る行事が「バラ行進」であった。

「埋立祝賀開港記念祭諸行事案内」（横浜都市発展記念館所蔵「〔昭和十二年開港記念祭資料貼込〕」所収。以下開港記念祭の記述はこれによる）によれば、六月一日に前夜祭があり、横浜公園音楽堂で流行歌手らによる「大音楽会」が、神奈川会館で市内芸妓連による「音曲競演会」が催された。

六月二日は、参加七〇〇名による「開港行列」が実施された。この「開港行列」は、午後〇時四〇分に横浜小学校を発した「黒船渡来御固」「外交の大舞台横浜村」「大政奉還御軍行」「青隊赤隊、農兵隊」「文明開化の横浜の姿ドンタク」などの仮装行列が、市役所～伊勢佐木町～日ノ出町～桜木町～馬車道～英国領事館をまわり、午後四時四五

図３　バラの生花で飾られた馬車に乗るミス・ヨコハマ　　横浜都市発展記念館所蔵
10人は５台の馬車に乗り、行進の先頭を行った。

分に横浜小学校に戻るルートをとるものであった。その一方、四時二五分に横浜公園で分離した「泰平悠々の東海道・大名行列」は、市電で保土ヶ谷に向かい、午後五時から洪福寺～浅間町～神奈川台～青木橋、そして午後六時三〇分に神流川公園にいたる旧東海道を歩いた。

六月三日の「バラ行進」は、ミス・ヨコハマ一〇名が乗るバラの生花で飾られた五台の馬車（**図３**）を先頭に、バラの生花をあしらった企業広告の自動車などを数多くしたがえた行進であった（**図４**）。

実際のところは、ミス・ヨコハマは応募者がなく、開港祭の委員会が「教養ある良家の子女ひとりひとりに白羽の矢を立て、両親を説き伏せて、やっと参加してもらった」のが実情であった。ミス・ヨコハマが着るバラ色のドレスと銀の靴は、舞台美術家として著名な伊藤熹朔のデザインであった。

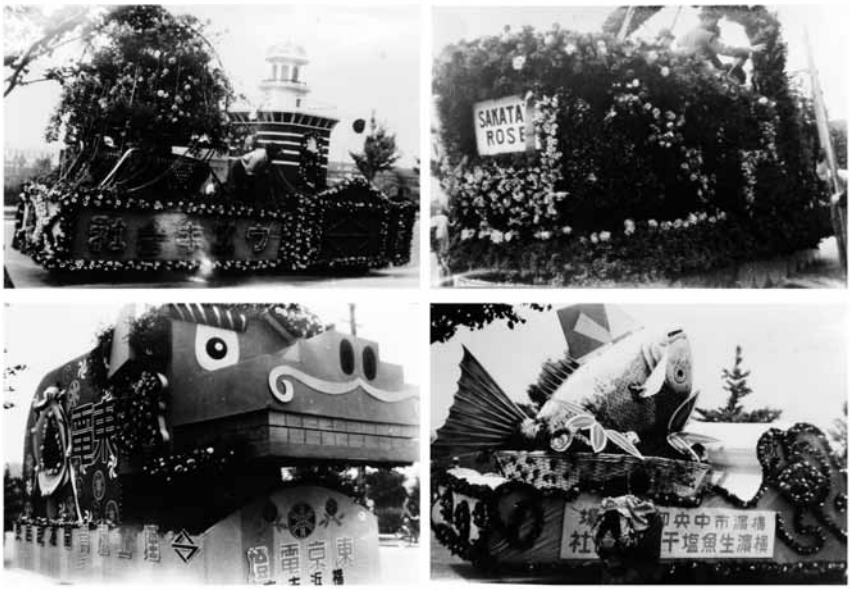

図４　「バラ行進」に登場した企業各社の花自動車　　元町・宮崎生花店所蔵
上左；横浜植木株式会社、上右：坂田商会（現サカタのタネ）、下左：東京電灯株式会社（現東京電力）、下右：横浜生魚塩干株式会社。

「バラ行進」の行程は、午前一〇時にホテルニューグランド前を発して、横浜公園～弁天通り～馬車道～市役所～羽衣町～曙町～伊勢佐木町～吉田橋～野毛町～日ノ出町～戸部町～高島町～横浜駅前～神奈川公園。正午の休憩をとり、午後一時三〇分に出発。大黒橋から埋立地区をまわり、国道に出て、午後三時に神奈川公園で解散、という休みを入れて都合五時間の大イベントとなった（**図５**）。

シアトルからのバラ苗の返礼、その増殖と市民への配布、愛市運動のシンボル化、そして「バラ行進」へとつづく一九三〇年代は、横浜市民がバラと触れ合う機会を持つことができた最も幸福な時期であった。その後、太平洋戦争と戦後の窮乏期、高度成長をへて、バブル経済の頂点にあった平成元年まで実に半世紀。横浜市花として選定されたのは、遅すぎたと言えなくもない。

（平野正裕）

図５　「バラ行進」の光景　　横浜都市発展記念館所蔵
上から、神奈川県庁前、弁天通り、伊勢佐木町通りオデヲン座前、市営埋立地内。